

不思議な縁^{えにし}

秋山 道雄

環境政策・計画学科

コラムが紡いだ輪（和？）

退職を3日後に控えた3月28日のことである。この日は、私のゼミを出た卒業生の有志が集まって記念会を開いていた。卒業後初めて会う顔ぶれもあって、話に花が咲いたひとときであった。会が散会してそれぞれが帰り支度をしているとき、2002年度入学の水谷佑介君が近づいてきて、「私の父が先生に会ったことがあると言っていました」という。

「はて、どういう関係だろうか」と問うと、

「中日新聞のコラムを依頼するために、先生のところを訪ねたとのことですよ」

「えっ、そうすると君はあの水谷支局長の息子さんか？」

「そうです」

「うーん」

「今朝、私がこの会に出席するというと、父からその話を聞きました」という。

水谷君も28日に話を聞くまでは、自分の父親が私と会ってコラムの依頼をしたことは知らなかったらしい。世の中には奇遇なこともあるものだというのが、このときの感慨であった。会話中にうーんという声を発したのも、その思いからきている。

中日新聞に「琵琶湖と環境」というコラムが連載された経緯は、昨年度の学部報に掲載した。2000年の晩秋から2010年の初夏に至る足かけ11年、正味9年7ヵ月におよぶロングランの連載であった。環境科学部の教員と院生・学生が、それぞれの専門分野に関する解説を書いたり、環境に関する時事的なイベントの紹介をするなど、琵琶湖と環境に関わる多彩な話題が盛り込まれている。

このコラムの依頼をしてこられたのが、当時中日新聞彦根支局長をされていた水谷良因さんである。そのいきさつについても学部報で紹介しておいた。当初、水谷さんが依頼してこられた際には、コラムをいつまで継続するかという点についてさしたる取り決めはなかった。水谷さんの説明では、半年でも1年でもこちらのできるころまでやってもらったら良いので自由に組み込んでくださいというニュアンスであった。そこで、私は気持ちを楽にしてこの依頼を引き受けることができた。実際のところ、このコラムをいつまで続けることができるのかは、私自身にとってもまったく予想がつかないことであっ

た。

以後、環境科学部の教員を主体とし、テーマによっては院生・学生も加わって連載が続いていく。水谷さんは、その後、飯田支局へ転勤され、以後は代々の支局長にコラムの実施が引き継がれていった。約10年ほど継続してコラムが終息に至った時、水谷さんもここまでコラムが続くとは想像されていなかったであろうと思いつつ、10年前の出発時期を振り返ったことであった。

このコラムは、このたび、大学創立20周年記念として環境科学部から出版するという機会を得ることになった。2015年6月6日に記念行事が行われるので、それに間に合うように出版しようということで2014年の秋から編集体制が組まれることになった。年が明けた2月下旬には、各執筆者に学部長から出版に至る事情の説明と原稿の点検・修正への依頼がなされた。3月28日は、こうした一連の動きが進み、執筆者から大学に返信が届いている最中であった。

水谷佑介君から28日に話を聞いた時、このコラムをめぐる複数の偶然が重なり、6月6日に向かって複合的な動きをしていたものが一挙に顕在化したのだという実感を抱いた。具体的には、以下のような事項が重なっている。

- ①コラムの誕生に関わった水谷支局長のご子息が、滋賀県立大学環境科学部環境政策・計画学科を志望して入学してきたこと。さらには、卒論ゼミの配属にあたって私のゼミを選択したこと。水谷君は、父親と私との関係は知らずにこうした進路を選択した結果、図らずも私の身近なところに水谷支局長と結ばれる糸が存在していたのであるが、2015年3月28日に至るまでまったく気がついていなかった。水谷君の姓が「水谷」なので、水谷さんと関わりがある人なのではないかという発想が少しでも湧けば、その時に水谷君に尋ねたはずである。そうすれば、10年以上前に水谷さんの状況はわかったのであるが、当時は水谷君と水谷さんがなにか関わりがあるのかといった発想がまったくなかった。それが、28日に顕在化したのである。
- ②コラムの連載が終わった後、この連載のきっかけを作られた水谷さんにその後の展開をお話しし、一言お礼を申し上げたいと思っていたが、

飯田に転勤された後も仕事柄別の地域に転勤されている可能性が高いので連絡はつかないのではないかと思ひ、その機会を得ないままに時間が過ぎていた。28日に水谷君から聞いたところでは、水谷さんは飯田の後名古屋に転勤となり、現在は退職されて彦根に戻り、佑介君と暮らしておられるということであった。水谷さんが身近なところに住んでおられるなどということはこれまた想像したこともない事態であったので、不思議な偶然の二重奏に出会うこととなった。

- ③このコラムを編集し20周年記念として出版しようとしている過程で、水谷さんの消息がわかったこと、しかも私が退職をする間にこの事実が明らかになったこと、などを思い返して、事態が偶然の三重奏へと展開していることを痛感した。

「退職に当たって」という一文の冒頭で、まずこれを書いたのは、私の個人的な感慨が促しているという面もあるが、それだけではなくこのコラム「琵琶湖と環境」がもつ意義の重要性からもきている。昨年度の学部報にコラムのいきさつをまとめた際に、それと合わせてコラムの全タイトルと執筆者名の一覧表を載せた。それをみると、年齢、性別、専門分野などを異にする執筆者が多様な話題を取り上げているので、コラム全体ではかなり広範な領域をカバーしていることがわかる。それらを順次読んでいくだけでも琵琶湖と環境をめぐる話題についての知見を得ることができるが、少し工夫をすればもっと有意義な活用もできるのではないかと感じていた。

今回の出版に当たっては、各コラムをその内容からみて近いものを中心に集め、7つの章に編成している。目次をみると、これまでそれぞれのコラムだけでは見えなかった話題のつながりが見えてきている。さらに、目次の行間を読んでいくと、このあたりはどうなっているのだろうかという疑問が湧き、次の探求へと読者を誘うような働きをしていきそうである。こうした可能性に気がつきつつあった折りに、水谷さんの消息を知ることになったので、コラムが結ぶ不思議な縁を実感することになった。

環境フィールドワーク

そもそもこのコラムが始まるきっかけは、水谷さんが環境フィールドワークⅡのBグループ（守山市を対象とし、「環境負荷の少ない地域づくり」というテーマで実施）に関する記事を目にされ、そこから「琵琶湖と環境」に関するコラムを設定してはどうかと発案されたことによる。したがって、この

コラムをめぐる事象を思い返していると、連想は環境フィールドワークへとつながっていく。

環境科学部が全教員参加の下で、1年生、2年生を対象に週1日の午後3時限分を使って環境フィールドワークを実施してからすでに20年が経過した。大学創設時に準備委員を務められた先生方が、環境科学部という新しい学部で環境を対象とした教育をする際に、フィールドワークは不可欠であるという認識をされたことが環境フィールドワークの誕生につながった。その発想は環境科学部の存立を支える主要な柱であるが、現実にそれを実行していくということがなかなか難しい。最初の3～4年は、全体の骨格を固めるのに多くの試行錯誤があったし、形がある程度できてからも、全教員が参加してフィールドワークを継続していく仕組みが定着するまでにかなりの時間とエネルギーを要している。

21世紀に入るとようやく体制が安定してきたので、今世紀になって本学へ赴任された教員は環境フィールドワーク形成期の事態をあまりご存じではないかもしれない。実施体制が定着してきたのを受けて、それまでの経験をまとめ、2007年に『琵琶湖発 環境フィールドワークのすすめ』（昭和堂）を出版することになった。この頃には、環境科学部ではフィールドワークを必修として本格的に取り組んでいるということが県内の高校には知れ渡っていたが、本書の出版によって県外にも知られるようになった。

本書を読まれた他大学の教員から、県立大学での経験を聞きたいという依頼があり、何件かの説明を断続的に進めた経緯がある。こちらの説明が一通り終わり、意見交換に入った場でほぼ例外なく質問されたのが、どうしたら全教員が参加してフィールドワークを継続していけるのかという点であった。フィールドワークを大学のカリキュラムに取り入れようとするところは少なくないが、実際にやってみるとなかなか継続しないという問題に突き当たる。環境科学部の場合は、それに対して具体例をもって答えることができるという点が特徴であろう。

環境フィールドワークを実施する際の運営組織としてフィールドワーク委員会が設置されている。当初は、運営に関する相談と各学科への連絡を主な業務としていたが、問題が発生するごとにそれを乗り越えるために協議をし、取り得る手段を発見していくという試行錯誤を進めることになった。これを継続していくうちに、毎週実施しているフィールドワークで何か問題が生ずるとフィールドワーク委員会で情報を共有し、かつ必要な解決策を検討することが運営のなかに定着していった。これと併

行して、フィールドワーク委員を経験した教員の中には、委員の任期が終わってからも、フィールドワークの運営で皮むけた対応をしていくケースがみられるようになった。環境フィールドワークの体制がある程度できあがった後に赴任された教員は、教員募集に応募する際にフィールドワークを担当することが必須となっていることを認識しているの、大学発足当時の教員とは異なった意識の教員が徐々に増えていくことになった。

こうした経験の蓄積は、コミュニティにおける自治会ないし町内会の運営に似ている。自治会の役員を経験した人の中には、仕事の負担が重かった場合、もうこんな仕事はこりごりだと言いつつも、また何年か先には役員が回ってくるので、自治会の行事にそれなりに対応するという人も少なくない。中には、自治会活動の重要性を認識して、積極的に関わるといふ人もいる。こうした多様な意識と行動が混在しながらも自治会活動が継続されるのは、同じ場所に住み続けるという意識がそれぞれの構成員に共有されているからであろう。

環境フィールドワークが設立当初の理念と枠組みを抱えた「ハレ」の状態から、日常生活を営む種々の行為の連鎖に入った「ケ」の状態へと進化することで、その継続が保証されていったように見える。日常性を獲得した環境フィールドワークという立ち姿が、20年という時間の意義を示していると感じる昨今である。

大学の立地

立ち姿といえ、滋賀県立大学の立地条件に思いがおよぶ。近年、東京や大阪の中心部や幹線鉄道の主要駅近辺に大学の学部や施設が立地するケースが目につくようになってきた。これは、第二次世界大戦後の産業立地政策が転換したことの余波である。戦後10年ほどを経過して、東京や大阪では人口と産業が集中し、大都市の過密問題が政策上の大きい課題となっていた。政府は、これへの対応策として、東京や大阪の中心部に大規模工場が立地するのを禁止した。このとき、大規模工場と並んで大学も人口集中を促す要素とみなされて工場等制限法の対象となった。東京では1959年から、大阪では1964年から立地規制が始まり、2002年の工場等制限法廃止まで続いた。この間に東京や大阪に大規模工場や大学を立地させようとする、規制のかかっていない郊外に向かうほかはなかった。大都市郊外に大学町ができていく背景の1つがこれである。そこで、2002年に工場等制限法が廃止になると、都心ないしその周辺部に立地する大学が出てくるようになっ

た。

滋賀県では人口や産業が南部に集中しているの、滋賀県が新たに大学を設立するにはバランスをとるために南部から離れた北東部を対象とした。1990年代に全国各地で設立された公立大学は、おおむねこうした性格を帯びている。いわば大学版の地域政策が展開したということになるのか。

地方都市の郊外に立地している滋賀県立大学は、近年の大都市中心部への大学の回帰という現象からすれば、時代の趨勢に反する位置にあると見る人がいるかもしれない。たしかに、大都市には種々の魅力的な機会があり、それゆえに人口が集中してきたことは間違いない。学生のような若い世代であれば、いっそう大都市の魅力に惹かれるということもあろう。しかし、これまでの経験から判断すると、県立大学のような立地条件を備えたところでこそユニークな教育ができ、人が育っていくのではあるまいか。

大都市の動きに背を向けて、地方都市に閉じこもることを奨励しようというわけではない。大都市の便益を享受したい場合には、大都市に出かけてそれを活用する。一方、日常生活は自然に接する機会の多い地方都市で過ごしつつ、学業に取り組む。「ハレ」と「ケ」の使い分けによって、学業の継続を進め得るのが県立大学の立地条件であろう。さらに、少人数教育が可能な学生の規模であることも、学業の成果を高めていく貴重な要因である。環境政策・計画学科の場合は、こうした少人数教育の利点を卒論指導において発揮させてきた。

退職に当たって2月上旬に最終講義を行ったが、その時何人かの卒業生の顔が会場にみえた。以後、3月28日の記念会に至るまでに、何度か卒業生が1人であるいは複数人で訪ねてきた。こうした機会に卒業生と話していると、決まって卒論の厳しさに話がおよんでいく。しかし、厳しくはあったけれども、あの卒論への取り組みが自分を鍛えたという感想も合わせて卒業生の口から発される。卒論をはじめとして、ここで学んだことが良い機会になったという卒業生の声を聞いていると、冒頭で水谷さんをめぐり出来事に不思議な縁を覚えたのとはいま一つ別の縁が、卒業生と大学をつないでいるのだという実感をもった。大学創立20年を経て、県立大学はその立地条件を生かしていく可能性を示してきたといえる。これから先、大学を取り巻く状況は厳しくなるという世評が聞こえてくるけれども、これまで県立大学と関わった人、今関わっている人が、大学の立地に未だ潜在している多様な可能性を発掘し、状況との格闘のなかで、不思議な縁の二重奏、三重奏が奏でられていくことを期待したい。